

[江戸後期の美術展によせて]

岡田為恭筆「春秋之図屏風」をめぐる

「春秋之図屏風」(個人蔵、図1、以下本作と記述)は幕末に活躍した絵師・岡田為恭(文政6年～元治元年/1823～1864)の稀少な屏風絵作例の一つであり、法量は各隻縦69.5cm、横181.6cmです。右隻は小松引、左隻は虫選(むしえらみ)を題材としています。

小松引は正月の子(ね)の日に野に出て小松を根ごと引き抜く遊びです。特に正月初めの子の日は「初子の日」と呼ばれ、この日は野に出て小松引をしたり、若菜を摘んで食したりして長寿や無病息災を願う行事が平安貴族たちによって楽しまれていました。本作の右隻を見ますと、野に生える小松を引き抜く童子たちの姿(図2)や、その様子をゆったりと眺める貴族などが描かれています。早春の行事にふさわしく、紅梅と白梅が美しく咲き、鶯が軽やかに飛んでいます。

虫選も平安貴族の遊興であり、虫の声の美しさを競う虫合のための虫を野で選びとり、虫籠に入れて宮中に奉りました。左隻の中央に描かれる童子は灯火で辺りを照らしつつ、今まさに虫を捕らえようとススキの草むらに手を伸ばそうとしているところです。銀色の夜露で濡れたススキの葉の上では

秋の虫が鳴いています(図3)。童子の傍らには紅白の紐で飾られた小さな虫籠が置かれています。画面右に立つ童女が手に持つのも同様の美しい虫籠です。野辺にはススキの他に女郎花、桔梗、野紺菊、萩などの秋草が咲き乱れています。平安貴族の春秋の野外での風雅な遊びが、総金地の画面に発色の良い顔料で豪華に描き表されており、為恭の王朝文化への憧憬がよく窺える作品となっています。

為恭は漢画を基盤とする狩野派の絵師の家に生まれますが、若い頃から、大和絵に傾倒し、古画の模写などを通じて大和絵を学習します。王朝文化に耽溺し、屋敷や衣服も王朝風にしたほどであったと伝えられます。大和絵の復興に努め、王朝行事を好んで画題に取りあげました。一雙の屏風や双幅の掛け軸に春と秋の王朝行事を対して描く作例を為恭は多く残しており、春の鷹狩と秋の茸狩を描く大和文華館蔵の「春秋鷹狩茸狩図屏風」(展覧会のお知らせ参照)もその一例です。「春秋鷹狩茸狩図屏風」では、右隻と左隻で春秋のモチーフを対照させるとともに、季節が異なる左隻の景観を敢えて連続させ、大きな

水流を中心として壮大なパノラマが広がる描写が印象的ですが、大きさの小振りな本作では景観は連続させず、右隻は右下から左上へ、左隻では主に左下から右上へと前景・中景・後景を対角線上に順に配しており、すっきりとした理知的な画面構成となっています。

右隻・左隻を並べて鑑賞した際の本作の大きな見所としては、春秋の対照だけでなく、時刻も対照的に描いている点があげられます。左隻に月が描かれていることから、虫選は夜の光景であることが分かります。秋の虫は夜に鳴きますので、虫選を月夜の光景として描くのは理に適っているのですが、単純にそうした理由だけでなく、為恭は月夜に美しい音が響くという画題を好んでいることも関係しているのではないかと考えられます。『平家物語』の中で為恭がしばしば描いたのは、秋の月夜に琴の音をたよりに仲国が小督の居場所を探しあてる場面ですし、作例が多く残る足柄山図(豊原時秋が父の篁の秘曲を源義光より足柄山で伝授される場面)では、取材元の『古今著聞集』に時刻の記載はないのにも関わらず、焚き火や月を描き込み、夜の光景としています(図4)。視覚が制限される夜には聴覚が研ぎ澄まされ、周囲も静まっているため、音がより美しく聞こえるように感じられます。夜の管弦の遊びや、秋の夜長に響く虫の音などは、王朝物語や和歌において多く取りあげられています。月光のもとに響き渡る音楽にまつわる題材は、王朝人

の優美な情趣をよく伝えるくれる題材として為恭は好んだのではないのでしょうか。本作の描写で興味深いのは、月を描き込むことで夜を表すだけでなく、左隻の霞の群青や土坡の緑青を右隻より濃く暗い色で描くことにより、左隻の虫選は夜、右隻の小松引は日中、と巧みに描き分けている点です。霞の色と区別するため、水流は反対に、右隻が濃い群青、左隻が淡い群青となっています。鮮やかな彩色の中の微妙な濃淡・明暗により、清々しい早春の日中の光景と、しっとりとした秋の夜の光景を繊細に描き分けています。

本作を収める箱には為恭自身による箱書があり、「春秋之圖屏風 雙 為澤三位卿 安政第四曆丁巳十月日 式部小丞為恭圖之」と記されることから、安政4年(1857)に公家の澤為量のために制作されたことが分かります。安政4年は徳川家の菩提寺である大樹寺の障壁画制作が完成した年でもあり、為恭の画業が充実していた時期です。箱に貼られた書付によると、右隻右端の貼紙「春ねの日のあそびの圖」と左隻左端の貼紙「秋ふしえらみの圖」は為量の筆になるといいます。澤為量は後の戊辰戦争において奥州鎮撫副総督として活躍した人物です。為恭の支援者には三条実萬などの公家もいたことが知られていますが、為恭作品の制作依頼者が具体的に分かる点でも貴重な作例です。蔵人所衆岡田出羽守の養子となることで貴族社会の一員となり、落款に自らの官位官職を仰々しく記すほど宮廷文化に憧れていた為恭ですが、為恭の描く伝統的な公家風俗は公家の間でも高く評価されていたことが窺えます。

(宮崎もも)

※図4は「復古大和絵師 為恭 幕末王朝恋慕」大和文華館、2005年、より複写しました。

図1 岡田為恭筆 春秋之図屏風 個人蔵

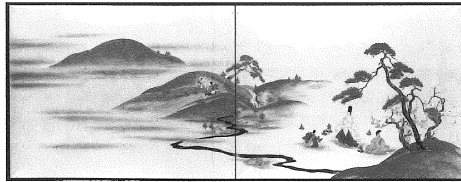


図3 図1左隻部分

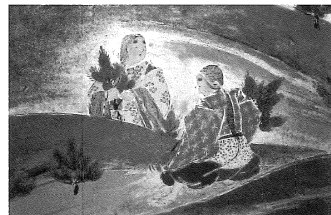


図2 図1右隻部分



図4 岡田為恭筆 足柄山図(双幅のうち左幅)個人蔵

季刊 美のたより No.181

平成25年 1月6日

発行 大和文華館